

## 『星の王子さま』における子ども性

—— キツネとの出会いによってわかったこと ——

生越 達\*

(2009年9月15日受理)

Childhood in *Le Petit Prince*

: Discoveries by Encountering the Fox

Toru OGOSE

キーワード: 子ども性、飼いならす、留まる

小論は、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』を読み解くことにおいて、子ども性がどのように扱われているかを明らかにすると同時に、現代の教育が、この「子ども性」から何を学ばなければならないのかを考察することを目的としている。とくに、「飼いならす」ことに焦点をあて、「心で見る」とはどのようなことについて考察することにする。

結果として明らかになったことは、次の点である。第一に、現代社会を生きるおとなたちは、忙しく動き回ることで留まることができなくなっていること、そしてこうした居場所の喪失が、人間存在にとって大きな意味をもっているということである。第二に、こうした居場所の喪失にたいして、「飼いならす」ことをとおして他者や世界とのあいだに絆をつくっていくことが大切であるということである。「飼いならす」ことは、時間をかけ、相手の世話をすることにより、相互的な関係をつくっていくこと、「ひまつぶし」をすることである。また第三に、「飼いならす」ためには、①しんぼう、②きまりが必要であるということである。だが、飼いならすことによって、人間は、この世界に居場所をもつことが可能になり、孤独から解放される。そして「飼いならす」ことによって、飼いならした相手との関係だけが変わるのではなく、世界が異なった様相をもって現われてくるようになる。

### はじめに

『星の王子さま』という作品において、王子さまは、さまざまなおとなと出会う。この作品では、おとなになることを、他者とのつながりを喪失し、そのいっぽうで他者や世界を道具化することであることとして描いている。サン＝テグジュペリによれば、おとなになることは、もともともっていた他者とのつながりを喪失していく過程を意味するのである。おとなとは、他者や世界と出会うことができなくなった存在である。

王子さまが訪れた六つの星の住民たちは、みなこのおとなの代表であった。また、キノコと呼ば

---

\*茨城大学教育学部

れる寄せ算ばかりしている存在への王子さまの強い口調からは、毎日毎日自らを忙しさのうちに駆り立て、仕事をしている現代人の生き方への強い批判が込められている<sup>1</sup>。おとなは、こうした生活をするだけで、人生の意味を問うことから免れることができる。つまり自己と向き合うことから免れることができるのである。

だが、このような生き方は独特の息苦しさにまわりつかれている。おとなになる途上にある子どもたちにとっては、ときに、それがとても苦しい。そして、そうした苦しさが、リストカットのようないわゆる「問題」行動として表現されたりすることにもなるのである。とするならば、「問題」行動は、彼らにとって、なんとか子ども性を守り抜こうとする試みとして考えることもできるだろう。おとなになっていくことから生まれてくるであろう孤独、それは人間として必然的な孤独なのかもしれないが、子どもたちは、そうした孤独を生きなければならない不安を訴えているように見える。

そして、最近の子どもたちが、生きることの意味の喪失を訴えることが多くなっているという事実から、私たちは、現代社会が、ますますおとな性を帯びて子どもを脅かしているのではないかということを考えざるを得ないのである。成熟社会と言われる現代社会は、ますます存在の不安と生きる方向性の喪失として現れてくる社会であって、子どもたちは、そうした状況のなかでなんとか「問題」行動をとおして、その苦しさを表現しているということではないだろうか。そうだとすれば、今日において、子ども性の持つ大切さについて考えてみることは何としても必要だということになるだろう。

サン＝テグジュペリによれば、おとなになることは、ある意味で退行なのである。おとなになるにしたがって、生来的に人間がもっていた他者や世界とのつながりが失われていく。こうした人間としてのつながりを取り戻すために、子ども性を取り戻すことが必要になるということでもある。

おとなには、大切なものがどんどん見えなくなっている。しかし、それは無くなってしまいうることを意味するのではない。また子どもだからといって、つねに、子どもの見方が守られているわけではない。だからこそ、つねなる取り戻しが求められるのである。王子さまもまた、多様なおとなと出会うことによって、自らのうちに子ども性を育てていった。飛行士である語り手も、また王子さまとの出会いのなかで、おとなになりゆく内で失われつつあった子ども性を再発見していく。そして読者である私たちもまた、『星の王子さま』を読み解くことをとおして、子ども性を取り戻していくのである。

もともとおとなになるということは、子どもの世界観や他者観とは異なった見方を学んでいくことである。自分の存在を他者や世界から切りはなし、おとなとしての、ものの見方を学んでいく。だが、こうしたまなざしが退行を内在させていることが忘れられてはならない。そして現代社会が、こうしたおとな性を強める社会であるとするならば、やはりこのまなざしを相対化していくということが大きな課題となるはずである。心の奥底に押し込められてしまっ見えなくなった子ども性を意識の表層に浮かび上がらせることを『星の王子さま』は可能にしてくれる。

もちろん、子ども性を取り戻すことは、おとなとしての常識を生きている私たちにとっては、ときに苦しいことであろう。秩序ある今の世界をかき乱し、私たちは混沌のなかへと突き落されてしまう。だが、いっぼうでは、心の奥にしまいこまれた子ども性に蓋をしようとしても、しきれものではない。あるいは、子ども性に蓋をしようとする社会は、子どもにとって息苦しい社会であり、

そしておとなにとっても、やはり息苦しい社会である。おとなもまた、存在の深層にしまい込んだ子ども性を抑圧し続けなければならないからである。したがって、いくら苦しくても、子ども性へと自らを解放し、受け入れていくことが必要だといえるだろう。

以下においては、『星の王子さま』、とくに「飼いならす」ことを巡る物語の展開に学びながら、子ども性とはなんなのかについて考えていきたい。

## 1・留まることを知らない人間

六つの星を旅してきた王子さまは、地球でも様々な出会いをとおして学んでいく。へびとの出会い、高い山でのこだまとの出会い、五千もの花との出会い、そしてキツネとの出会い。とくに、キツネとの出会いは、王子さまにとって、もっとも重要な出会いであったといえるだろう。キツネとの出会いをとおして、「飼いならす」ことの重要性を知ったからである。ここでは、はじめに、キツネと出会って、飼いならすことの重要性を知った王子さまが、さらにその後、二つの出会い(転轍手とあきんど)をすることの意味を考えてみることにする。

### (1) 自らの場に留まることのない人間

キツネと出会った後、王子さまは、転轍手(スイッチ・マン)と出会う。スイッチ・マンの仕事は、汽車を右に左に振り分けることである。自分の仕事を説明するなかで、スイッチ・マンが、人間をモノのように扱っていることがわかってくる。「『旅客を、千人ずつ荷物にして、えりわけているんだよ。おれの送り出す汽車が、旅客を右に運んでいったり、左に運んでいったりするんだ』<sup>2</sup>。忙しさのなかで人間性を見失っている人間は、荷物、つまり道具なのである<sup>3</sup>。

スイッチ・マンは人間をよく観察している。

「みんな、たいへんいそいでるね。なにさがしているの、あの人たち？」

「それ、機関車に乗っている男も知らないんだよ」

すると、また、もう一つのキラキラとあかりのついた特急が、こんどは、反対の方向へごうごうと走ってゆきました。

「みんな、もう、もどってきたんだね」と、王子さまがききました。

「あれ、おんなじ客じゃないんだ。すれちがったんだよ」と、スイッチ・マンがいました。

「じぶんたちのいるところが、気にいらなかったってわけかい？」

「人間ってやつあ、いるところが気にいることなんて、ありゃしないよ」と、スイッチ・マンがいました。<sup>4</sup>

サン＝テクジュペリは、スイッチ・マンの口を借りて、人間が自ら居場所をもとめない存在であると言っている。人間は自らの場所に落ち着いて留まることができないのである。それは、つねに自分の存在の場を受け入れることができないからである。自分の存在の場を気にすることなく、つねに新たな場を求めるのが人間だということになるだろう。

こうした人間の姿は、つねに未来に希望をもって生きてきた近代人を表現しているようにも見える。そして、現状に満足せず、将来に希望をもって生きることは、素晴らしいことのようにも思える。

だが、スイッチ・マンは、人間が、なにを探しているのかもわからなくなっていることを強調している。留まることを忘れた人間は、いつも新しい場を求めているのだが、だからといって何を求めているのかはわからなくなってしまうのである。ほんらい、おとなは生きる方向性を子どもに伝えていく役割をもっているといえるだろう。だが、おとなは、自分自身、どこに向かったらいいのかを、もはや、わからなくなっている。したがって、子どもに対しても、どうぜん、その方向性を提示できないまま、ただ現在の場に留まることなく、つねに新たな場を求め続けることだけを伝えるほかないのである。

王子さまは次のように言う。

「子どもたちだけが、なにがほしいか、わかっているんだね。きれいでできた人形なんかで、ひまつぶして、その人形を、とてみたいせつにしているんだ。もし、その人形をとりあげられたら、子どもたちは、泣くんだ……」<sup>5</sup>

それに対して、スイッチ・マンは、「子どもたちは幸福だな」<sup>6</sup>とつぶやく。子どもたちは、何がほしいかわかっている。つまり、大切なのは何かわかっているのだ。

その意味は、キツネの言葉とかわらせて、考えてみる必要があるだろう。たとえば人形である。この人形はどんなに粗末なものでもかまわない。なぜなら対象としての人形ではなく、かかわりのなかでの人形が重要だからである。ただの布でできた人形をかまわないのである。でも、そこにはその人形に費やした時間が存在する。それが「ひまつぶし」の意味である。高価であって交換価値が高い人形であるから大切なのではなく、その人形と過ごしてきた時間があるから大切なのである。そして人形と、こうしたかかわりをもてる子どもたちは幸福なのである。だが、おとなはどんなに忙しくしていても、そうしたかかわりを世界や他者ともっているわけではない。

おとなにとって、居場所がないこと、つねに自らの場が気に入らないことは、他者や世界とのかかわりをもてないことと深くかかわっていることになる。そして、おとなが世界や他者とのかかわりをもてずに居場所をなくしていることは不幸なことなのである。このエピソードは王子さまの心に残ったようで、後になって飛行士(語り手)に次のように語っている。

「みんなは、特急列車に乗りこむけど、いまではもう、なにをさがしているのか、わからなくなっている。だからみんなは、そわそわしたり、どうどうめぐりなんかしてるんだよ……」<sup>7</sup>

## (2) 自らの時間に留まることのない人間

つぎに、王子さまは、あきんどに出会う。あきんどは、のどのかわきがケロリとなおる丸薬を売っている。一週間に一粒のむだけで、一切水を飲みたくなくなる薬である。

「なぜ、それ、売ってるの?」と、王子さまがいました。

「時間が、えらく儉約になるからだよ。そのみちの人が計算してみたんだがね、一週間に五十三分、儉

約になるといんだ」と、あきんどがいました。

「で、その五十三分って時間、どうするの？」

「したいことをするのさ……」

<ぼくがもし、五十三分っていう時間、すきに使えるんだったら、どこかの泉のほうへ、ゆっくり歩いてゆくんだがなあ>と、王子さまは思いました。<sup>8</sup>

このエピソードからも大人が何を大切にしたらいいのを見失っていることがわかる。そもそも儉約した時間を計算するという発想自体が、時間を対象化してとらえていることを意味する。ほんらい、時間は生きられるものである。時間を充実させる経験によって、はじめて時間は時間として成立するのである<sup>9</sup>。儉約した時間をどうするのかを聞かれたあきんどは、「したいことをするのさ」と答える。だが、何に使うかわからずにもかく時間を儉約してみたところで仕方ない。

王子さまが心のなかで思ったことは、あきんどへの強い批判となっている。そもそも水を飲み歩いていくことに価値があるのであって、無暗に時間を節約したところで、何の意味もない<sup>10</sup>。これは「ひまつぶし」の大切さも似ている。水をのむことのプロセスを生きることによって、人間は世界を豊かに経験することができるのであって、のどの渇きをいやすという結果だけを求めて生きているのではない。丸薬を吞んでしまえば、もはやプロセスという時間の流れのなかに留まることが奪われてしまうのである。とくに、『星の王子さま』のなかでは、水を飲むこと、のどの渇きをいやすことは、精神的な特別の意味をもっており、王子さまの旅そのものの意味ともかかわっている。

### (3) 世界に根づいていないということ

王子さまが地球に来て、へびの次に出会った砂漠の花との会話は、実は、上記の二つのエピソード以前に、「留まる」ことのない人間存在について述べている。王子さまは、キツネと出会うことによって、上記の二つのエピソードを経験する前には「留まる」ことの大切さに気づく準備が出来ていた。だが、砂漠の花と出会った時点では、まだはっきりとはそのことに気づいていない。だが、サン＝テクジュペリは、すでにここで人間存在の不確かさを問題にしている。花は次のように言っている。

「人間？ 六、七人は、いるでしょうね。何年かまえに、見かけたことがありましたよ。だけど、どこであえるか、わかりませんねえ。風邪に吹かれて歩きまわるのです。根がないんだから、たいへん不自由していますよ」<sup>11</sup>

人間は、根なし草なのである。植物のように大地に根をはってはいない<sup>12</sup>。だからこそ、近代という時代は、このように発展してきたともいえるかもしれない。一つの場所にとどまらずに新しい世界に踏み出すことが可能となるからである。

だが、根なし草であるということは、いっぽうでは、人間が、生きる方向性の決まっていない不安定で不確かな存在でもあるということの意味する。とくに現代社会は、そうなのである。教育について考えてみよう。教育基本法においても、表だって伝統だとか、道徳性だとか、規範意識、公共の精神などを持ち出さなければならぬのは、根なし草である人間存在が成熟社会の中でますます根を奪われているからなのであ

る。そして大地に根づいていないから、本質的に、人間は孤独なのである。人間は、世界や他者とつながっていない。だからこそ、留まることが苦手である。つねに動いていないと不安になってしまう。そして、近代は、この不安を利用して発展してきたのである。

サン＝テクジュペリは、こうした社会に対して、もう一度子ども性を取り戻すことで、大地に根づくことが可能だと考えているように見える。子ども性を取り戻すことで、人間の特徴である根なし草であることから解放されようとしているように見える。そこで、次に、より具体的に根のない人間がどのようにしたら、世界や他者とつながることができるのか、「飼いならす」という概念をめぐって考えてみたい。

## 2・「飼いならす」ことの大切さ

### (1) 「飼いならす」ということの意味

自分の星にある花が、世界にただ一つの花だと思っていた王子さまは、地球にそっくりそのままの花が五千も咲いているのを見て、ショックを受ける。そして二つのことを考える。一つは当の花のことである。一つは自分のことである。

「もし、あの花が、このありさまを見たら、さぞこまるだろう……やたらせきをして、ひとに笑われまいと、死んだふりをするだろう。そしたら、ぼくは、あの花をかみほうするふりをしなければならなくなるだろう。だって、そうしなかったら、ぼくをひどいめにあわそうと思って、ほんとうに死んでしまうだろう……」<sup>13</sup>

「ぼくは、この世に、たった一つという、めずらしい花をもっているつもりだった。ところが、じつは、あたりまえのバラの花を、一つ持っているきりだったのだ。あれと、ひざの高さしかない三つの火山——火山も一つは、どうかすると、いつまでも火をふかないかもしれない——ぼくはこれじゃ、えらい王さまなんかになれようがない……」<sup>14</sup>

こうして王子さまは泣き始めてしまう。泣き始めてしまった理由は、上記の二つのことがショックだったからである。

花からすれば、自らの存在の唯一性を否定されてしまえば、他者に対して自らの存在を支えることができなくなってしまう。その結果、死んだ「ふり」と介抱する「ふり」といった演技を続けなければならなくなってしまう。自己存在の唯一性は、花にとっても大切な意味をもっていたのだ。そして王子さまからすれば、花と演技関係のなかで生きなければならないことは、つらいことなのである。

王子さまからすると、「たった一つという、めずらしい花」を所有していたと思っていたのに、それが「あたりまえのバラの花」だと気づき、やはり自己存在が傷つく。なぜなら、王子さまとしては、珍しい特別のものを所有していたと思っていたのに、それがたいしたものではなかったということは、自分の王子さまとしての権威にかかわることだからである。こんなあたりまえのものしか所有していない自分は、「えらい王さまなんかになれようがない」<sup>15</sup>と考えたのだ。

花も、王子さまも、同じように、バラの花が、そのものとして珍しく貴重な存在であることにとらわれている。

つまり所有の概念にとらわれていることがわかる。六つの星をめぐる王子さまも、さて、自分のことになると、完全に子どもらしく世界や他者をとらえているわけではないのである。

すると、そこにキツネが現れる。出会いの場面では、花との関係はひとまずおいておかれ、王子さまとキツネとの関係についての会話がすすむ。その際のキーワードが「飼いならす (apprivoiser)」という言葉である。

「ぼくと遊ばないかい？ ぼく、ほんとにかなしいんだから……」と、王子さまはキツネにいいました。「おれ、あんたと遊ばないよ。飼いならされちゃいけないんだから」と、キツネがいいました<sup>16</sup>。

ここで「飼いならす」<sup>17</sup>という言葉にひっかかった王子さまは、キツネにその意味を尋ねる。

「よく忘れられていることだがね。＜仲よくなる＞っていうことさ」<sup>18</sup>

とキツネは答えて、さらに次のように説明する。

「うん、そうだとも。おれの目から見ると、あんたは、まだ、いまじゃ、ほかの十万もの男の子と、べつに変わらぬ男の子なのさ。だから、おれは、あんたがいなくなっちゃいいんだ。あんたもやっぱり、おれがいなくなっちゃいいんだ。あんたの目から見ると、おれは、十万ものキツネとおんなじなんだ。だけど、あんたが、おれを飼いならすと、おれたちは、もう、おたがいに、はなれちゃいられなくなるよ。あんたは、おれにとって、この世でたったひとりのひとになるし、おれは、あんたにとって、かけがえのないものになるんだよ……」<sup>19</sup>

キツネは、「飼いならす」ことは、＜仲よくなる (créer des liens 絆をつくる)＞ことだ、という。「飼いならす」という言葉のニュアンスとしては、一方的・片面的に支配する意味にもとれるように思われるが、『星の王子さま』における「飼いならす」にはそうした意味はない。逆に、「飼いならす」ことは相互的な出来事である。「飼いならす」という言葉は、慣れ親しむといった意味で用いられているのである。だが、それは現実としては簡単なことではない。そのために多くの時間をかけることを求められるからである。またそこで築かれるのは、社会的な表層的關係ではなく、悲しみや喜びをともにする深い関係である。そのことをサン＝テグジュペリは「飼いならす」という言葉で表現しているのである。

ここでは自己や他者の存在の唯一性にかかわる点が重要である。「たったひとりのひと」や「かけがえのないもの」は、個そのものの特徴ではないのである。相互的關係のなかで、「たったひとりのひと」や「かけがえのないもの」になっていくのである。ここに、六つの星の住民の生きている世界とはまったく異なる世界が現われてくる。

上記に述べられた王子さまのバラの花との関係がここで一気に解決される。バラの花は、自らの個としての特徴によって自己存在を守る必要はない。特徴の唯一性などなくても、つまりそれ自身は何の変哲もないひとつのバラの花であっても、王子さまとの関係性のなかで、真のバラらしさ(ユニークさ)が育っていく。王子さまと関係しているのは、無数のバラの花のなかで、その花だけだからである。そして、そのためには、単に所有したり(所有されたり)、支配したり(支配されたり)、計算したり(されたり)といった一般的

な関係を超越して行かなければならない。王子さまとバラの花とは、時間をかけることによって、濃密で相互的な関係を築いていかなければならない。いっぽう、一般的な関係においては、真に出会うことはなく、したがって自らの存在証明とはなりえない。その結果、六つの星の住民がそうであったように、永遠に自らの存在証明を求めて所有や支配を増大させていくといった循環を生きざるを得ないのである。

いっぽう、相互的に「飼いならす」関係は、いちど成立すれば、たとえ別れたとしてもその関係はずっと続く。バラの花は、その個としては「この世に、たった一つという、めずらしい花」ではなかったかもしれないが、「飼いならす」ことをとおして、王子さまにとっては、永遠に特別の、たった一つの花になるのである。しかも「飼いならす」関係において生まれた関係は、比較を超えた関係である。いくら外側から捉えて比較しようとしたって、そこには両者の関係の軌跡は見えないからである。

しかも前もって出会いを計算することはできない。出会いは恩寵であり、偶然性に支配されているからである。したがって、「飼いならす」相手を計画的に決めることはできない。たまたま出会う運命だったからこそ、出会い、そして「飼いならす」のである。比較考量のなかで、「飼いならす」相手を決めることなどできない。出会うことそれ自身が計算(計画)を拒否するのである。

そして、飼いならすためには勇気が求められる。いかなる出会いの恩寵にたいしても、自らを開いておかなければならないからである。六つの星の住民のように閉ざされた存在には、いくら出会いが恩寵であるにしても、けっしてその出会いが訪れることはない。

王子さまは、キツネに会う前に、すでに、バラの花を飼いならしていた。でも、そのことに気づかなかった。ようやくキツネと出会うと、その話をきいて、何が大切なのかを知るのである。実際に、王子さまは、キツネに促され、もう一度五千ものバラの花に会いにでかける。熱がこもったのだろうか、一気に花たちに言葉をあびせて、花たちをきまり悪くさせてしまう。

「あんたたち、ぼくのバラの花とは、まるっきりちがうよ。それじゃ、ただ咲いているだけじゃないか。だれも、あんたたちとは仲よくなかったし、あんたたちのほうでも、だれとも仲よくなかったんだからね。…」

「あんたたちは美しいけど、ただ咲いているだけなんだね。あんたたちのためには、死ぬ気になんかなれないよ。そりゃ、ぼくのバラの花も、なんでもなく、そばを通ってゆく人が見たら、あんたたちとおなじ花だとも思えるかもしれない。だけど、あの一輪の花が、ぼくには、あんたたちみんなよりも、たいせつなんだ。だって、ぼくが水をかけた花なんだからね。覆いガラスもかけてやったんだからね。ついたてで、風にあたらないようにしてやったんだからね。ケムシを——二つ、三つはチョウになるように殺さずにおいたけど——殺してやった花なんだからね。だまっているならいるで、時には、どうしたのだろうと、きき耳をたててやった花なんだからね。ぼくのものになった花なんだからね」<sup>20</sup>

バラの花は、所有することによって「ぼくのもの」になったのではない。時間をかけ、世話をすることによって「ぼくのもの」になったのである。これは、ビジネスマンが星を所有するような場合とはまったく異なっている。もちろん、結果ではなくプロセスが大切なのである。時間をかけたこと自体が大切なのである。「飼いならす(apprivoiser)」には、語感からしても、個人のものにする(privi)というニュアンスがあるが、相互関係のなかで互いに互いを「ぼくのもの」「わたしのもの」にしていくのである。

上記に述べたように、「飼いならす」には勇気が必要である。出会うことは、ときに傷つけ、傷つけられる

関係を生きることだからである。だが、ひとたび「飼いならす」ことに成功すれば、それは、所有のように他者や世界を自己の内に取り込む(他者の自己化)が生じるのではなく、自己が世界へとひろがっていく経験(自己の他者化)となるのである。

この点は、重要である。飼いならすことは二者の関係を変えるだけではない。世界そのものを変える力をもっているのである。この点は『星の王子さま』のなかで繰り返し強調されている。キツネは言う。

だけど、もし、あんたが、おれと仲よくしてくれたら、おれは、お日さまにあたったような気持ちになって、暮らしてゆけるんだ。足音だって、きょうまできいてきたのとは、ちがったのがきけるんだ。ほかの足音がすると、おれは、穴の中にすっこんでしまう。でも、あんたの足音がすると、おれは、音楽でもきいてる気持ちになって、穴の外へはいだすだろうね。それから、あれ、見なさい。あの向こうに見える麦ばたけはどうかね。おれは、パンなんか食やしない。麦なんて、なんにもなりやしない。だから麦ばたけなんて見たところで、思い出すことって、何にもありやしないよ。それどころか、おれはあれ見ると、気がふさぐんだ。だけど、あんたのその金色の髪は美しいなあ。あんたがおれと仲よくしてくれたら、おれにや、そいつが、すばらしいものに見えるだろう。金色の麦をみると、あんたを思い出さるうな。それに、麦を吹く風の音も、俺にやうれしいだろうな……<sup>21</sup>

王子さまを「飼いならす」ことができれば、王子さまの足音にも喜びを感じることができるようになる。それどころか王子さまの金色の髪を連想させる麦畑やそこを吹きわたる風の音さえ、素晴らしく感じるようになっていく。さらには、王子さまを「飼いならす」ことによって、「お日さまにあたったような気持ち」にさえなることができるのである。つまり、世界の雰囲気さえもが変わってしまうのである。

同じ主張は、王子さまと語り手(飛行士)の別れの場面でも繰り返される。王子さまを「飼いならす」ことによって、語り手には、星が、他の人とは異なった意味をもって現われてくるようになる。王子さまの笑い声が好きな飛行士は、空を見上げると星がみんな笑っているように見えるようになる。あたかも、笑い上戸の鈴をたくさんもらったかのように感じることもできるというのだ。「飼いならす」ことによって、人は、他者とつながり、またその他者とのつながりをとおして世界とつながることができるようになる。そして世界は王子さまへと語りかけてくるようになる。そして悲しい時も、笑いを与えてくれるのだ。

まったく、ふしぎなことなのです。あの王子さまを愛しているあなたがたと、ぼくにとっては、ぼくたちの知らない、どこかのヒツジが、どこかで咲いているバラの花を、たべたか、たべなかつたかで、この世界にあるものが、なにもかも、ちがってしまうのです……

空をごらんください。そして、あのヒツジは、あの花をたべたのだろうか、たべなかつたのだろうか、と考えてごらんください。そうしたら、世のなかのことがみな、どんなに変わるものか、おわかりになるでしょう……

そして、おとなたちには、だれにも、それがどんなにだいじなことか、けっしてわかりっこないでしょう。<sup>22</sup>

王子さまは、飛行士との出会いのなかで次のようにも語っている。

だれかが、なん百万もの星のどれかに割いている、たった一輪の花が好きだったら、その人は、そのたくさん星をながめるだけで、しあわせになれるんだ。<sup>23</sup>

ある他者を「飼いならす」ことで、その他者との親密性が育まれるだけでなく、世界と親密につながる事が可能となる。もちろん、そのために悲しい思いをすることもあるかもしれないが、世界が自己存在を支えてくれるようになるのである。そして、孤独が癒されるようになる。王子さまは、それを「おくりもの」と呼んだりしている。語り手にとって、飼いならした相手である王子さまの笑顔は、砂漠の水と同じように、力を与え、世界を変えてくれるのである。

「ぼっちゃん、ぼっちゃん、ぼく、その笑い声をきくのがすきだ」

「これが、ぼくの、いまいったおくりものさ。ぼくたちが水をのんだときと、おなじだろう」<sup>24</sup>

だがおとなは「飼いならす」ことをせず、他者や世界を対象化し、忙しく立ち働いている。その結果、いつも孤独で、そして孤独であるがゆえに、さらに忙しく動きまわらなければならないのである。おとなは何がだいじなのかをもう一度ゆっくりと考える必要があるのだろう。

この社会の中では、たしかに自己実現は大切かもしれない。しかし、いくら自己実現をめざして頑張ったって、いつまでも孤独で、いつまでも終わりがなく頑張らなければならないのだとしたら、何のために自己実現を目指すのだろうか。自己実現を目指して頑張ることは、私たちに幸せにしてくれるのだろうか。その自己実現が、六つの星の住民のように、他者や世界とつながらずに、ただ対象化するばかりだとするならば、頑張れば頑張るほど人は孤独になっていくだけであろう。

『星の王子さま』においては、まなざしの変換が求められているのである。小さな一つの花でもいい。そこに時間をかけ、「飼いならす」ことによって世界が変わる。それが大切なのである。多くのものにかかわる必要などない。一つのもののかかわりが世界全体を変えてくれるからである。王子さまは言っている。

「きみの住んでるとこの人たちったら、おなじ一つの庭で、バラの花を五千も作ってるけど、……じぶんたちがなにかほしいのか、わからずにいるんだ」<sup>25</sup>

ただ、数を競えばいいのではない。数を競うことで自己を拡大しようとすればするほど、逆に、自己は小さく閉じ込められていく。それよりも、一つのことを大切にすることで、自己は世界に広がり、孤独を免れることができるのである。

このことは、また関係のなかにこそ人間の価値はあるということを意味するだろう。現代社会においては、個性ということが強調される。だが、関係を捨象した個性の強調を『星の王子さま』は否定する。能力を個に還元し、競争をあおる現代社会において、真にその存在のユニークさが尊重されることはない。つねに比較のなかで、そして数字のなかで他と切り離された仕方での唯一性が強調されるからである。繰り返し述べてきたことだが、『星の王子さま』によれば、ユニークさは出会いの結果であり、出会い方のなかで生まれるものなのである。

## (2)「飼いならす」ことの二つの要素

### ① しんぼう

それでは、具体的に「飼いならす」ためには、どうしたらいいのだろうか。「飼いならす」ことは、友だちを見つけることである。ところが、『星の王子さま』のなかで繰り返し触れられているように、人間は忙しすぎて友だちを見つける暇がなくなってしまう。そこで、キツネは次のように言う。「(人間は)あきんどの店で、できあいの品物を買ってるんだがね。友だちを売りものになっているあきんどなんて、ありやしないんだから、人間のやつ、いまじゃ、友だちなんか持ってやしないんだ」<sup>26</sup>。どうしたらいいのか尋ねられて、さらに、キツネは、次のように言っている。

「しんぼうが大事だよ。最初は、おれからすこしはなれて、こんなふうに、草の中にすわるんだ。おれは、あんたをちよいちよ横目でみる。あんたは、なにもいわない。それも、ことばっていうやつが、勘ちがいのもとだからだよ。一日一日とたってゆくうちにや、あんたは、だんだんと近いところへきて、すわれるようになるんだ……」<sup>27</sup>

「飼いならす」ことの第一の要素は「しんぼう」である。「しんぼう」とは時間をかけることである。時間が関係を育てて成熟させてくれる。だからこそ、できあいのものを買ってくることで、友だちはできないのである。「しんぼう」には、世界や他者とのつきあいがスピードのなかに呑みこまれることによって、そのつきあいが表層化している私たちへの批判が込められている。

情報社会においては、人も物ものすごい勢いで私たちを通り過ぎていく。時間の流れの速い社会である。そのなかで私たちの内なる時間の流れも速くなってしまふ。だが、サン＝テクジュペリは、こうした時間の流れに身を任せることを拒否する。こうした社会であるからこそ、時間をかけることには、しんぼうが必要だということになるだろう。このように、「飼いならす」ことには、自分のなかに流れる内なる時間の流れをゆったりさせることを求められるが、これは、そう簡単なことではない。現代社会を生きる私たちの身体を流れる時間は知らないうちに速くなってしまっているからである。

そう考えると、子どもたちが携帯をとおして多くのメル友をもっていることは、「飼いならす」こととは相反していることになるだろう。顔を見たことがなくても、すぐに友だちになる。そしてその数を競ったり、関係確認をすることで安心したりする。子どもたちは他者とつながろうとし、つまりは「飼いならす」ことへの窓口を探しているのだが、その出発点を誤ってしまっているようにも見えるのである。

多元的自己<sup>28</sup>をもって、世界とかかわる子どもたちも同じである。彼らは、器用に世界に自己を合わせるが、本来は、世界とつながることにも時間が必要なはずである。それが、あつという間につながってしまうことは、むしろ「飼いならす」ことから遠ざかっていることを意味するだろう。多元的自己を生きる子どもたちも、世界とつながる(飼いならす)窓口を探しつつも、やはりその方法を間違っていることになる。

いずれにしても、子どもたちは現代社会のスピードの速い社会のなかで、ゆったりと「飼いならす」時間を奪われてしまっているのである。

またキツネは、ことばの危険性についても触れている。キツネは、「飼いならす」ためには「なにもいわない」ほうがいいのだという。ことばは勘違いのもとなのである。なぜなら、ことばは、他者そのもの、モノそのものから離れ、一般化することを本質とするものだからである。もちろん、『星の王子さま』も、言葉で書かれている。だからこそ、サン＝テクジュペリは詩的な言葉で語り、触れるように語ろうとしているのであろう。ほんとうは、ことばよりも身体で感じるものが大切である。身体で感じながら、次第に近くにすわれるようになっていく。「飼いならす」ことは、言葉のやりとりなのではなく、身体的な出来事なのである。

ほんとうに「飼いならそう」と思ったら、その人の語る言葉に耳を傾けてはいけない。このことは、王子さまとバラとの関係そのものである。

「あの花のいうことなんか、きいてはいけなかったんだよ。人間は、花のいうことなんていいかげんにきいてればいいんだから。花はながめるものだよ。においをかぐものだよ。……(引用者略)ぼくは、あの時、なんにもわからなかったんだよ。あの花のいうことなんか、とりあげずに、することで品定めしなけりゃあ、いけなかったんだ。ぼくは、あの花のおかげで、いいにおいにつつまれていた。明るい光の中にいた。だから、ぼくは、どんなことになっても、花から逃げたりしちゃいけなかったんだ。ずるそうなるまいはしているけど、根は、やさしいんだということをくみとらなけりゃいけなかったんだ。花のすることしたら、ほんとうにとんちんかんなんだから。……(引用者略)」<sup>29</sup>

おとなは忙しい社会を生きている。「飼いならす」時間なんてない。身体でつながる時間などとれないのである。だから言葉を用いて他者とかかわり、他者を理解しようとする。見ることのできないおとなにはそれが便利だし、時間も節約できる。だが、言葉は嘘をつき、誤解を誘う。言うこととすることは異なっているのである。あるいはむしろ裏腹なのである。トンチンカンなのである。

王子さまは、もし他者を理解しようと思うのならば、むしろその他者が語る言葉を聞いてはいけないという。言葉で理解することによって、理解は表層化してしまうのである。もつといえ、言葉を受け入れることは、必然的に相手を誤解することなのである。むしろ沈黙のなかで、深い理解が可能になり、深い交流が可能になるのだ。言葉に頼るようになればなるほど、言葉のあいだからこぼれおちるものへのまなざしを失い、関係の深層は見えなくなっていく。

だが、ここでキツネが言おうとしているのは、言葉の否定だけではない。「飼いならす」ためには、やはりその相手の近くでその相手と出会うことが必要とされる。つまり時間をかけることで、ようやく言葉を越えた理解が訪れるのである。バラの花との関係もそうであっただろう。バラに寄り添うことにより、はじめてバラの行動の意味が王子さまに現われてくるのである。

## ② きまり

「飼いならす」要素として、キツネがもうひとつ触れているのが、「きまり(儀式 reites)」である。

「いつも、おなじ時刻にやってくるほうがいいんだ。あんたが午後四時にやってくるとすると、おれ、三時には、もう、うれしくなりだすというものだ。そして、時刻がたつにつれて、おれはうれしくなるだろう。四時には、もう、おちおちしていられなくなって、おれは、幸福のありがたみを身にしみて思う。だけど、もし、あんたが、いつでもかまわずやってくるんだと、いつ、あんたを待つ気持ちになっただいのか、てんでわかりっこないからなあ……きまりがいるんだよ」

「きまりって、それ、なにかい？」と、王子さまがいました。

「そいつがまた、とかくいいかげんにされているやつだよ」とキツネがいました。「そいつがあればこそ、一つの日が、ほかの人ちがうんだし、ひとつの時間が、ほかの時間とちがうわけさ。おれをおっかけるかりうどにだって、やっぱりきまりがあるよ。木曜日は、村のむすめたちとおどるんだから、木曜日ってやつが、おれには、すばらしい日なんだ。その日になると、おれは、ブドウばたけまでのして出るよ。だけど、

かりうどたちが、いつだっにかまわず、おどるんだったら、どんな日もみんなおんなじで、おれは、休暇なんてものがなくなっちゃうんだ」<sup>30</sup>

「飼いならす」ことについての「きまり」の意味はわかりにくい。内藤は「きまり」と訳しているが、「きまり」といっても、その原語からしても、また文脈からしても、儀式を意味していることは明らかである。では、なぜ「飼いならす」ことについて、儀式が必要とされるのか。①では、「飼いならす」には、時間をかける必要があること、そして言葉ではなく身体的関係を大切にしなければならないことが明らかになった。

だが、いっぽうでは、「飼いならす」ことは、安定した世界を必要とするのだ。信頼にたる世界のなかで「飼いならす」ことは成立するのである。ある秩序のなかで「飼いならす」ことは成立する。サン＝テクジュペリには、つねに自己の内に還元されない他への意識が働いているように見える。サン＝テクジュペリの「個」を超えた人間になっていこうとする方向性が「きまり」を重視していることにつながっている。

## 注

1 この点については別に論じることにする。小論は、実際にはこの5倍もの長さの論文の一部である。

2 サン＝テクジュペリ 『星の王子さま』(岩波書店、2000) p.104.

3 人間を荷物として見ている転轍手という存在は、よく考えると、非常に恐ろしい存在である。

4 同書、p.104.

5 同書、p.105.

6 同書、p.105.

7 同書、p.111.

8 同書、p.106.

9 この時間のテーマは、ミヒヤエル・エンデの『モモ』を思い起こさせる。

10 『星の王子さま』においては、泉(井戸)に水をのみに行くということは特別な精神的意味をもっている。小論においてもものにこの点に触れる。

11 サン＝テクジュペリ、前掲書、p.88。ここでの記述は、ハイデガーの後期思想を思い起こさせるが、言及することはしない。

12 根こそぎになっていることに関して、ハイデガーの後期の思想と深くかかわっている。

13 サン＝テクジュペリ、前掲書、p.92.

14 同書、p.92.

15 ここで、「えらい王さま」と訳されているのは、大きな王子さまと直訳できる言葉である。つまり題名でもある「小さな王子さま」との対比で考えると、自分は「小さな王子さま」のまま、「大きな王子さま」になれないということの意味するだろう。ここからは、この「小さな」に込められた意味は、年齢だけではないということ、またこの段階で、王子さまは、やはり「えらい」王子さまを目指していたこと、また王子さまは、「えらい」かどうかは所有で決まるとい、おとなの考えをもっていたことがわかる。

16 サン＝テクジュペリ、前掲書、p.93.

17 たしかに「飼いならす」という言葉は意味がわかりにくい、サン＝テクジュペリ自身がこのことばを用いている。訳としては「なずむ」とか「手なづける」と訳したりしているものもある。小論では内藤にしたがって「飼いならす」という言葉を用いることにする。

18 サン＝テクジュペリ、前掲書、p.94.

19 同書、p.94.

20 同書、pp.101-102.

21 同書、p.97.

22 同書、p.132.

23 同書、p.41.

24 同書、p.123.

25 同書、p.114.

26 同書、p.98.

27 同書、p.98.

28 多元的自己とは、その場に合わせ自分自身の存在を保護色のように変えていく自己のことを意味する。この点に関しては、拙著「子どもたちの多元的自己と同調：新しい物語創造の可能性を探って」(『教育方法学研究』第29巻、2003)、pp.1-12.を参照のこと。

29 サン=テクジュペリ、前掲書、p.48.

30 同書、pp.98-100.